

2016 3/10

【第三種郵便物認可】

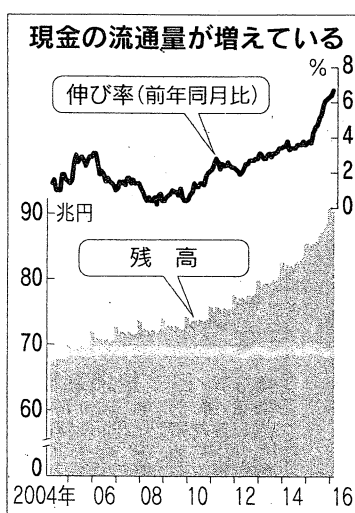
タンス預金急増

現金流通13年ぶり伸び

日銀のマイナス金利政策を受け世の中に出回る現金が大きく増えている。日銀の統計によると2月の現金の流通量の伸び率は前年同月比6・7%増で13年ぶりの大きさだった。預金金利がゼロ近くに下がっているのを踏まえ、銀行に預けるより自宅の金庫などにお金をためこむタンス預金が増えているようだ。

現金の伸び率は定期預金などの保証額を元本1000万円と利息までとするペイオフ解禁の影響が残っていた2003年2月以来の大きさだ。日銀によると、特に伸びているのが一万円札。五千

マイナス金利・マイナンバー影響



円札や千円札の伸び率は2%以下だが、高額紙幣である一万円札だけは7%近く伸びている。

「マイナス金利政策が決まってから金庫が売れ始めた」。都内の家電量販店の販売員は手応えを感じている。5万円前後の耐火性金庫が人気だ。関東を中心にホームセンターを展開する島忠でも直近、金庫が前年の2倍の勢いで売れている。

業務用の金庫を扱うクマヒラでも、企業からの問い合わせが増えている。個人などがお金を銀行から自宅の金庫へと移しているのは、銀行への預金が割に合わなくなったためだ。大手銀行の預金金利は年0・001%で、100万円預けても年10円しか増えない。現金自動預け払い機(ATM)の手数料などを考えれば、収支は赤字とい



う預金者が多そう。もちろん現金を手元におけば、盗難などのリスクは高まる。総合警備保障(ALSOK)によるとマイナス金利政策を導入した2月半ば以降、因果関係は不明だが家庭の防犯の資料請求が1・2割増えたという。

「マイナンバー(税と社会保障の共通番号)の影響も見逃せない」(第一生命経済研究所の熊野

英生氏)。現金の伸び率が高まり始めたのは15年春ごろ。マイナンバーの導入を政府が積極的に宣伝し始めた時期と重なる。制度導入で政府に資産を把握されてしまうのではないかと不信感が現金志向を強め、マイナス金利政策がこの傾向に拍車を掛けた可能性がある。

マイナス金利で現金が消費や投資に向かうようになるのが日銀の狙いだ

が、タンス預金として自宅に死蔵されてしまっは経済の活性化につながらない。マイナス金利政策をいち早く導入したスイスでも、最高額の紙幣である千円札(約12万円)の発行が急増する弊害が目立つ。

日銀が今後、銀行からの預金の一部にける金利を現在のマイナス0・1%から引き下げれば、現金を引き出す動きがさらに強まる展開もあり得る。「マイナス金利の限界が早めに到来する可能性」(ゴールドマン・サックス証券)も指摘され始めた。

タンス預金の増加を背景に金庫が売れている(東京都足立区のホームセンター)